

# ディカーニカ近郷夜話 前篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

はしがき

青空文庫



『まつたくこれは奇態な本だ、　　デイカーニカ近郷夜話　か？』

いつたい　夜話　とはなんだらう？　何処かの蜜蜂飼かなんかが  
こんなものを世間へ発行しだをつて！　お蔭さまなことだよ！　羽  
根ペンを拵らへるのにどれだけ鷺鳥を裸かにし、紙を漉くのにど  
れだけ檻褻くづをつかつたら堪能ができるのだらう！　貴賤の別  
なく猫や杓子までが見やう見真似で、やたら無性に墨汁へ指を突  
つこんでも突つこんでも、まだ足りないのだ！　あげくの果てに  
は、こんなどこの馬の骨とも分らない蜜蜂飼風情までが、柄にも  
なく変な野心をおこすのだ！　まつたく、かう碌でもない活版刷  
の反古ばかり矢鱈に殖えた日には、一体これをなんの包み紙につ

かつたものやら、おいそれと考へつくことも出来やしない。』

かういつた横槍が飛び出すだらうとは、もう一と月も前から、ちやんと感づいてゐたことなんで！ いや、まつたくちとらのやうな田舎ものにとつては、この井の中から世間さまへ顔突きだすといふことが——どうもはや！——よくある奴で、ちやうど立派な旦那がたのお邸へ戸惑ひして足をふんごんだのと頓とひとつで、人々がぐるりをとりまいて直ぐにからかひだす。それも奥むきの奉公人でもあらうことか——ぼろぼろの服装なりをして裏庭で土いぢりでもしてゐさうな小穢ならしい小僧つ児までがいつしよになつて、四方八方から足を踏みならしながら、がなりだす。『何処へのこのこと迷ひこんで来やがるのだ？ いったい何をし

に來やがつたんだ？ さあ出て行け、このどん百姓めが、とつとと出てうせやあがれ！』つてんで……實際の話だが……。いや、何も言ふがものはない！ まつたく、このわしにとつては、広い世間さまへ顔出しをするよりは、年に二度\*ミルゴロドへ出むく方がよつぽど安易らくなんで、ところが、そのミルゴロドの地方裁判所の監督書記にも、あすこの偉い和尚にも、もう五年このかた頓と会はないやうな次第でな。——したが、いつたん顔を出したからには、泣いても笑つても一通りの弁いひわけ疏はしておかざばなるまいて。

ミルゴロド 小露西亞ポルタワ県下の小都會。ドニエー

プルの支流ホロール河の沿岸に位し、『ディカーニカ

近郷夜話』に次いでゴーゴリが書いた著作集『ミルゴロド』は、この地名を採つて標題としたのである。

さて、親愛なる読者諸子よ、——いや飛んでもないことを申して御免なされ、（若しかしたら、こんな蜜蜂飼風情があなた方にむかつて、まるで自分の仲なかうど人か教父にでも話しかけるやうな、不躰けな物の言ひ方をするのをさぞかし御立腹になるかもしれないが）——われわれの部落むらでは昔からのならはしで、野良仕事むらがすつかり片づくといふと、待つてゐたとばかりに百姓たちは長の冬ぢゆう、のうのうと体を休めるために煖炉べちカの上へ這ひあがり、手前ども同業者仲間むらはめいめいの蜜蜂を暗い土窖つちむろへかこふのぢや。その頃になると、もう空には一羽の鶴も姿を見せず、枝には

梨の果みひとつ残つてはゐない。が、その代り、夕方にさへなれば  
必らずどこか往還のはづれに灯影がさして、笑ひ声や唄声が遠く  
までも聞え、\*バラライカや、時にはワイオリンの音までが漂う  
て来る。がやがやといふ話声や騒々しい物音が伝はつて来る……。  
これがわれわれ仲間の所謂 夜会 なんぞな！ まあ言つて見れ  
ば、あなた方の舞踏会に似たやうなものではあるが、さうかとい  
つて、まるきり同じものだとも申しかねる。あなた方が舞踏会へ  
お出かけになるのは、いはば足をふらふらさせたり、口に手をあ  
てて、そつと欠伸をなさうらうらうのために他ならないが、われわれの方  
はさうではない。てんでに紡つむ錘むや麻あさ梳しきを持つた娘たちが先づ一  
軒の家へどやどやと寄りつどふ。そして初はな手のあひだは、どうや

ら一生懸命に仕事に身をいれてゐるやうで、紡錘はビイビイ唸り、唄声はずんで、娘つこたちはめいめい傍目もふらぬ有様なのぢや。ところが、そこへワイオリン弾きをつれた若い衆連が不意に押しかけて来ると同時に——どつといふ叫び声があがつて、とてつもない馬鹿騒ぎが持ちあがり、踊りが始まり、なんともはやお話にもならぬ悪戯わるさがおつぱじまる始末なのぢや。

バラライカ 露西亞の農民間に愛用される楽器の一種で、共鳴胴の表面が三角形をなす、マンドリンに類似した三絃琴。指頭で絃を搔きならして感傷的な音色を出す。

だが、何よりも嬉しいのは、一同ひしひしと一と塊りに寄りたかつて、謎々を解いたり、または単に——無駄口をたたく時ぢや。

いやどうも、何か一つとして口の端にのぼらぬやうなことがあるだらうか！ 古い昔話といふ昔話が一から十まで蒸しかへされるのぢや！ ありとあらゆる怖ろしい怪談が持ちだされるのぢや！

したが、かくいふ蜜蜂飼ルードウイ・パニコーのところの夜会で語られたやうな珍談奇話に至つては、先づほかでは聞けないぢやらう。時にどうして部落むらの連中がこのわたしに ルードウイ・パニコ 赤毛の旦

那1 などといふ渾名をつけたものか——頓1とどうも合点がいかん。わたしは、髪の毛だつて今では赤毛どころか白髪1の筈ぢや。しかしわれわれの仲間では、いったん渾名をつけられたが最後、泣いても笑つても、それが未来永劫に亘つて用ゐられるのがならばしな1んでな。それはさて、よく祭礼の前夜などに、堅気な人た

ちがこの蜜蜂飼の荒あばら家やへお客にやつて来て、卓をかこんで席につく——さうなつたら、ただもう耳を澄まして聴き入るよりほかはない。それもその筈で、集まつて来る人々はといへば、どうしてどうして、そんじよそこいらの十把ひとからげの水呑百姓などではなく、この蜜蜂飼などよりぐんと身分の高い人々にさへ、訪問を受けるのが肩身の広いやうなお歴々ばかりなのぢや。早い話が、あのディカーニカ寺院の役僧、フオマ・グリゴリエキツチを御存じでがせう？ いやどうして、素晴らしい人物で！ あの人が実に面白い物語を聴かせてくれたものぢや！ この小冊子ほんの中にもそれが二つ載つてをる。この人は、よく田舎寺の役僧などが著てゐるやうな縞柄ハライトの襦ハライト袍などは決して身につけてをらん。

それどころか、たとへ平日ひらびに訪ねて行つても、いつも、片栗粉で  
 つくつた\*キツセリの冷たくなつたやつバラホンのやうな色あひの、薄手  
 の羅紗で仕立てた寛衣をまとつてをお客を迎へるがの、その生地  
 は\*ポルタワで一\*アルシンループリに六留からだした品ぢや。また、こ  
 の人の穿いてゐる長靴タールがつひぞ樹脂臭かつた、などといふ者は村  
 ぢゆうに一人もゐないどころか、そんじよそこいらの百姓だつた  
 ら大喜びで粥カシヤへ入れて食ふやうな、飛びきり上等の鷲鳥脂で自分  
 の靴を磨いてゐることは隠れもない事実なのぢや。それにまた、  
 あの人と同じ役柄の人たちがよくするやうに、寛衣の裾で鼻を拭  
 いたりなぞするところを見た者も、誰ひとりない。あの人は何時  
 もきまつて、きちんと折りたたんだ、縁に赤い糸ぬひとりで刺繡をした

真白な手ハンカチ巾を懐ろから取り出して、然るべく用を足すと、またもやそれを几帳面に十二折りに折りたたんで、懐中へ仕舞ひこんだものだ。ところで、お客の一人に……いや、この人物は衣裳さへつけさせたら、てもなく陪審員か裁判官と見紛ふほどの貴公子であつたが、よく、かう、鼻の前さきへ指を突つ立てて、その指の頭を見ながら喋りだしたものでな——それがまた恐ろしく美辞麗句の羅列で、まるで活版に刷つたものでも読むやうな塩梅式なのぢや！ それをおとなしく、じつと聴いてゐようなものなら、いつか此方こちらがふさぎの虫にとり憑かれてしまふくらゐで。何が何やら、ぶち殺されたつて解るこつちやない。いつたい何処からあんな文句を寄せ集めて来たものだらう？ 或る時、フオマ・グリゴリー

エキツチが実に穿つた一口話をこしらへて、この男をあてこすつたものぢや。といふのは——さる役僧について読み書きを習つてゐた一人の学僕が、おつそろしい拉典語きちがひになつて父親のところへ戻つて来たが、こちとらのつかふ正教の言葉さへ忘れてしまつて、どんな言葉にでも　ウス　といふ語尾をつけないと虫がをさまらず、<sup>ロパータ</sup>匙鋤をロパトウスだの、<sup>バーバ</sup>女をバブウスだのと言ふ始末。ところで、或る日のこと父親とつれだつて野良へ行きをつたが、この拉典語先生、ふと熊手を見つけると、父親に向つて、『これは、お父さん、こちらの言葉ではなんとか言ひましたつね？』と訊ねたもんぢや。そしてぽかんと口を開けたまま、熊手の爪のところを踏んづけをつたと思ひなされ。すると、父親の返

辞より先きに、熊手の柄がピヨンと跳ね返つて来て、息子のおで

こにいやといふほど打つかつたものさ！『えい、この忌々しい熊グ

ラブリ

手 めが！』と、二三尺も上へ跳びあがりながら、片手でおで

こをおさへて、先生、悲鳴をあげをつた。『ほんに、こやつめが、

——ええくそつ、こやつの親爺が橋のうへから悪魔にでも突き落

されやあがればいい、——人の額を打ちやあがつて、おお痛い！』

なんと、どんなもので！ 奴さん忽ち名称なまへを想い出しをつたでは

ごわせんか！ とな。こんなあてこすりが、この凝つた言ひまは

しに憂身をやつしてゐる語り手の氣に入らう筈がない。先生ひと

ことも口をきかずに席を蹴立つて部屋のまん中へ出ると、脚をか

うふんばつて、すこし前こごみに首をうつむけてな、豌豆いろの

＊カフターンの後ろ衣かくし囊へ手を突つこんで、漆塗りの丸い嗅煙草入を引っぱり出すなり、その蓋に下手くそに描いてある何処か異国の大将の面つらに指弾きを一つ喰はせておいて、消炭と独うど活の葉とをまぜて挿つた嗅煙草をたつぷり一つまみ摘んだが、その手をばいやに氣取つて鼻の方へ持つて行つたかと思ふと、その煙草を残らず、すうつと、拇指ひとつ鼻にふれずに宙で吸ひこんでしまつた——が依然として口をきかない。別の衣かくし囊へ手を突つこんで、やをら青い碁盤縞の木綿の手ハンカチ巾を取りだした時、はじめで、豚に真珠さ……と、諺めいたことを口のなかで呟やいただけぢやつた。　どうやら喧嘩になりさうだぞ。　と、わたしはフオマ・グリゴリーエキツチの指が徐ろに＊馬鹿握ドウリーヤを拵らへようと

してゐるのを見て、さう思つた。ところがいい塩梅に、うちの老ば妻ばあが氣をきかせてな、ほやほやの焼麩麩クニシユにバタをつけたやつをテーブル卓子へだしたので、一座の衆は期せずしてそのまはりへと集まつた。拳こぶしを突きつけようとしてゐたフオマ・グリゴリーエキツチの手も、つい焼麩麩クニシユの方へ差しのばされて、皆の衆は例によつて例の如く、主婦の技うでまへ倆の鮮やかさを口々に褒めそやしはじめたものぢや。ほかにもう一人、語り手がゐたが、その人は（どうもそれを寝しなに思ひ出すのは、ちと具合が悪いけれど）実に身の毛もよだつやうな怖ろしい話をして聴かせたものぢや。だが、わたしはわざとその話はこの本へ載せなかつた。このうへ堅気な人たちをおどかしては、皆の衆がこのわたしを鬼かなんぞのやう

に怯ぢ怖れだすかも知れないからぢや。もし神のお恵みで新年まで生きながらへて、もう一冊の本を出すやうなことにでもなれば、その時こそ、あの世から迷つて出てくる亡者だの、むかしむかし、この正教の国にあつたくさぐさの不可思議な出来ごとだのの物語で、少しばかりぞうつとさせて進ぜてもよろしい。それと一緒に、ひよつとしたら、この蜜蜂飼が孫たちに話して聴かせたお伽噺もお目どほりをするかもしれない。ちやんとして聴くなり読むなりして頂けさへすれば、選り出すのがちと億劫ではあるけれど、こんな本の十冊やそこいらの話の種にことは欠きませんのぢや。

キツセリ　　ジェリイか葛湯に似た一種の料理。

ポルタワ　　南露ポルタワ県の首都、ドニエープルの支流

ウオルスクラ河の沿岸にあり、一七〇九年北方戦役に際し、小露西亞に攻め寄せた瑞典軍を彼得一世が撃破せしところ。

アルシン 露西亞の尺度——〇・七二米に当る。

カフターン 一般農民の用ゐる外套様の長上衣。小露西

亞人の用ゐるスエートカに対応するもの。

馬鹿握ドウーリヤ 拇指の頭を食指と中指の間から出して握つた

拳、これを相手の面前へ突き出すことによつて侮蔑嘲弄を表はす。シーシユカともいふ。

さうさう、もう少しで、いちばん大切なことを忘れてしまふところぢやつた。わたしのところへ諸みなさん君がおいでになるのだつた

ら、国道をデイカーニカ目ざして真直にやつて来て頂けばよろしい。手前どもの部落むらがちつとでも早くお分りになるやうにと思つて、わざわざデイカーニカの地名ところなを本の標題に置いたやうな次第でな。デイカーニカといへば、もう百も御承知のことであらう。それあもうその筈で、あすこぢやあ、家屋いえだつて蜜蜂飼風情の小舎などとはずんときれいで、果樹園ときたら、いやどうも、あなた方の彼得堡ペテルブルグにだつて、あれだけのものはちよつとやそつとには見当りますまいからね。それで、デイカーニカまでおいでになつたら、穢けがならしいシャツ一枚で鷺鳥の番をしてをる出あひ頭の小僧つ兎に、蜜蜂飼のルードウイ・パニコーの家は何処だい？とお訊ね下され。さうすれば、あすこだよと言つて、その小

僧つ児が指をさしてすぐにお教へするでせう。もしお望みとあれ  
 ば当のこの部落むらまで、先きに立つて御案内することとせう。※し  
 お断わりしておかねばならないのは、後ろ手なんぞ拱んで、いは  
 ゆる容態ぶつた歩き方などなさるのは、見合はせて頂きたいこと  
 で、といふのは、こちらの村道といふやつが、あなた方のお邸の  
 前の大通りみたいに坦・砥の如しとは、ちよつと申しあげかねる  
 からで。をととし一昨年をのこと、例のフオマ・グリゴリーエキツチがディ  
 カーニカからやつて来て、たうとう新らしい馬車と鹿毛かげの牝馬も  
 ろとも、崩穴がけへ落つこちてしまつたといふ始末でな、それも自身  
 の手で手綱を捌き、そして時々は自分の肉眼の上へ更に買ひもの  
 の眼をおつつけおつつけしてゐたにも拘らずぢや。

さるかはり、一度お客においで下すつたなら、それこそ、恐らく生まれでこのかた、つひぞ召しあがつたこともないやうな甜まくは瓜うりを御馳走いたしますよ。それに蜂蜜なら、請合つて、そんなよそこいらの部落むらでは金輪際、見つかりつこない飛びきり上等の蜜を進ぜます。まあ、思つてもみて下され——蜜房を持つてくるてえと、部屋ぢゆうにぶんぷんと芳香がみなぎりわたるといふ始末でな、いや、とてもとても想像することも出来ませぬくらゐ、まるで涙か、それともよく耳環にはめる高価な水晶のやうに、混りつけのない蜂蜜ですぢやて。それから、うちの老妻ばばあが御馳走する\*ピローグですよ！それがどんな素晴らしいピローグだか、ひとつお眼にかけたいくらゐで、いや砂糖、まるつきり砂糖のや

うでな！ そいつを頬ばりだすと、もうバタが唇くちをつたつてたら  
 たらと流れだす始末。まつたく考へて見るに婦女子をなごどもといふや  
 つは何から何まで実に器用なものぢや！ いつか皆さんは茨いばらの実  
 を入れた梨の濁麦酒クワスだの、乾葡萄や黒梅の入つた混成酒ワレヌーハを召し  
 あがつたことがおありかな？ それとも、牛乳ちちいりの雑炊ブートリヤを  
 召しあがつたことがおありかな？ いやはや、この世の中にはな  
 んと夥しく、いろんな食べ物がありますことぢやらう！ つまみ  
 にかかつたが最後、腹うまいっぱい、しこたま詰めこまずにはゐられ  
 ませんわい。美味うまいものあさりといふやつは、実になんともいひ  
 やうのないものでしてな！ 去年のことぢやが……。いや、それ  
 はさて、わたしとしたことが、何をしやべりこけてしまつたこと

やら？ つまるところは、ただお出かけになつてさへ下さればよろしいので、一刻いつときもはやくおいでになつてさへ頂けばな、さうすれば、もう、逢ふ人見る人ごとに、いちいち吹聴なさらずにはゐられないほどの素晴らしい御馳走をして進ぜますよ。恐惶謹言

ピローグ　パイに似た露西亞独特の菓子。

蜜蜂飼　ルードウイ・パニコー

しるす



## 青空文庫情報

底本：「デイカーニカ近郷夜話 前篇」岩波文庫、岩波書店

1937（昭和12）年7月30日第1刷発行

1994（平成6）年10月6日第8刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本の中扉には「デイカーニカ近郷夜話 前篇」の表記の左下に「蜜蜂飼ルードウイ・パニコー著はすところの物語集」と小書きされています。

入力：oterudon

校正：伊藤時也

2009年8月6日作成

2014年6月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ディカーニカ近郷夜話 前篇

## VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 はしがき

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>